

## 佛像の出現をめぐる

本学教授 荒 牧 典 俊

はじめに

インド古代のヴェーダ祭儀文化は、おおそ紀元前千五百年以来、紀元前四、五百年くらいまで、千年をこえる長い歴史をもつのですが、その間、「神殿もなければ、神像もなかった」といわれますように、造形芸術をほとんど全くもっていませんでした。それは、インド文化が根本的に「言葉の文化」であって、ヴェーダ讃歌をうたいあげる現場においてのみ真理が現成するのだ、それ以外には祭儀で用いられた祭具・祭壇などすらも、祭儀が終わった後には、破壊され捨て去られるべきであり、そこには、いかなる真理も存在しないと考えられたからでした。

57 (荒牧) つづいてヴェーダ祭儀文化の末期になってウパニシャッド哲学運動が起こり、そこから苦行者運動が展開していつて、そのような思想背景からゴータマ・ブツダが出現されたことは、周知のところですが、ここにおいても、かれら

森林に入った苦行者達は、あらゆる言葉の根源の根本語「オーン」という聖音を思惟しながらヨーガの修行をしたのであって、まったく造形芸術をもちませんでした。「オーン」「オーン」と発音しながら、いまここに根本真理を体得しようとしていたのです。

ところが、いまやゴータマ・ブツダが、三十五歳で菩提樹下で大悟徹底し身体をもったまま涅槃を實現し、まったく欲望もなく自我意識もないまま説法しつづけて八十歳で身体を捨てて涅槃に入られたとき、新しい可能性が開かれたと考えられます。といえますのは、佛弟子達は、ゴータマ・ブツダの遺体を火葬に付して舍利を得て、それを分配して各地に佛塔をつくったと伝えられています。この佛塔が、やがてインドにおいて最初に造形芸術がつくられる場所になります。かれら佛弟子達にとって、佛塔は、どのような意味をもっていたのでしょうか。

かれら佛弟子達は、毎月、満月の日には佛塔のあるところに集まってきてゴータマ・ブツダの言葉を傳承し、それにもとづいて原始経典を創作して読誦しつづけていったと考えられますが、かれらは、佛塔のあるところにゴータマ・ブツダが涅槃に入ったまま永遠に実在しておられると信じたからこそ、そこでゴータマ・ブツダの言葉を傳承し原始経典を創作して読誦することができたのでしょう。そこに実在しておられるゴータマ・ブツダからインスピレーションを受けてこそ、ブツダの言葉を「如是我聞」として経典にしていくことができたでしょう。それでは、そこにおいて造形芸術が発達しはじめるとは、どういう意味があるのでしょうか。

わたくしは、ここにはインド思想史そのもののヒンドウイズム化という根本転回があるのであって、そのような根本問題として理解されねばならぬところがあると思います。ここでは佛教思想史の内の問題として考えますとき、つぎのように言うことができるか、と思います。ゴータマ・ブツダが涅槃に入られて百年たち二百年たつてきますと、つぎからつぎへと造られていく佛塔のあるところにゴータマ・ブツダが実在しておられることが、だんだん信じ難く

なってきたのではないでしょうか。そこで、かれら四、五世代もたつてからの佛弟子達は、叙事詩「マハーバータ」の運動などとも連動して「佛伝」「ジャータカ」などの佛敎文学を創作しはじめ、それを美術的に表現する造形芸術を発達させ、さらに音楽・演劇などの芸術をも発達させ、新しいしかたでゴータマ・ブツダの实在を体験しようとしてはじめるのではないのでしょうか。

ここに、きわめて興味深い問題があります。即ち、こうして佛敎文学をうたい佛敎芸術を表現するようになったにもかかわらず、ゴータマ・ブツダのお姿を佛像としては表現しない「無佛像」時代が、さらに二百年ほど、つづくという事です。いったい、どうして佛弟子達は、ゴータマ・ブツダの实在を、さまざまなシンボルによって表現するにとどめて、佛像としてストレートに表現しなかったのでしょうか、そしてそれでは、どうして紀元後百年くらいにもなつてから、突如として佛塔の中心部から佛像が出現し、どんどん発達していくのでしょうか——これが、標題に掲げました「佛像の出現をめぐる」という問題です。

いったい、どうして佛像として表現しなかったのでしょうか、という問いに対しては、わたくしは、佛弟子達が、佛塔のいますところにゴータマ・ブツダが实在していますと信ずることができる限りは、いまさら佛像を必要としなかった、と答えることができるか、と思います。

それでは、どうして佛像が出現するのでしょうか、という問いに対しては、いよいよゴータマ・ブツダの实在が信ぜられなくなつて、いわば「佛なき世」のニヒリズムに入った段階で、新しいしかたで「空」「無相」「無願」の三三昧において諸佛に直々にお目にかかるという宗教体験が成立したからである、と答えることができるか、と思います。そこで本日の講演では、とくに第二の問題について、佛像が出現するにあつて、どのような宗教体験があつたかを、「佛伝」「ジャータカ」などをほめうたう文学運動が讚佛・讚菩薩文学をへて大乘經典運動へと展開していくとこ

ろにあつた宗教体験の発達と関連させて考察してみたいと思います。そのことによつて佛像が出現したという佛教芸術上の一大変は、大乘經典運動が始まつたという佛教思想史上の一大変と無関係ではないだろう、ということを示し上げてみたい、と思います。さらに、ここには「佛なき世」のニヒリズムにおいて佛の實在をふたたび証知するとは、どういう宗教体験か、そこにおいて佛像をして佛として顕現せしめている根本真理は何か、というような現代哲学にも通ずるような問題が、ふくまれているように思います。

### 1 佛像の出現をめぐる

さて、わたくし達は、これまで上述したような佛像の出現という問題をめぐつて、

- (1) 歴史的に、いつの時代にどこの地域で佛像は出現したか、
- (2) 美術史的に、どのような形態で佛像は出現したか  
—— 佛塔の塔身内部からか、あるいは単独像としてか、
- (3) 佛教学的に、どのような思想運動から佛像は出現したか、
- (4) 佛教哲学的に、どのような根本真理として佛像は出現したか、

というような観点から研究しようとしてきたし、またこれからも研究することができる、といえると思います。本節では、はじめの二問について、ごく簡単に従来までの研究をふまえて、わたくしのかりそめの理解を述べさせていただいた上で、つぎの二節によつて後の二問について經典などを引用しながら、やや詳しく論述することとします。

さて、従来までの佛像の出現についての研究は、第一の「歴史的にいつの時代にどこの地域で佛像は出現したか」という問題を中心に、主として佛教考古学者、佛教美術史家の手によって研究されてきたといえます。それらの研究によれば、インド文化史において造形芸術が始まったのは、やっとアシヨールカ王（在位紀元前二六八—三三〇）時代になってからであって、ペルシャ文化の影響を受けたことが明らかにされています。それ以後、佛塔を中心として佛伝・ジャータカ図・装飾文様などが造形表現され、どんどん発達していくにもかかわらず、その間、久しく二百年くらいも無佛像のままであった、やっと紀元後一世紀頃になって突如としてマトゥラーとガンダーラ両地域で、ほぼ同時に佛像が出現しはじめた、というようなことが解明されてきました。

わたくしとしては、この第一の問いについては、紀元後一世紀後半頃、マトゥラーで佛像が造られはじめたのであり、それが当時さかんになりつつあった「絹の道」の貿易の通商ルートに沿って、ほとんど即時に西北インドのガンダーラ地方や南インドのアマラーヴァティなどへと伝えられ、それぞれの地域においても佛像が造られるようになったのだ、と考えておきたいと思っています。いま、その論証を試みることはできませんが、マトゥラーの佛像が、他の二地域へどのように伝来したかについて、ごく簡単にコメントしておきます。まず西北インドのガンダーラ地方においては、佛伝の主要な諸場面が佛塔をぐるっと一周するように配置される中で、各場面中心のブツダが、佛像として表現されるところから佛像運動が始まるようですが、それらの中でも「帝釈窟説法図」が、ある重要な位置をしめる如くであるのは、マトゥラーにおいて、その「帝釈窟説法図」から佛像が出現しはじめたことを反映しているかもしれません。ともかく「帝釈窟説法図」が、佛像の出現から発達へかけて中心的作用を果たしたことは、疑いありません。それは「帝釈窟説法」經典が、ハーブの伴奏で佛の頌めうたをうたうという新しいしかたで佛の出現を経験し佛の説法を聴聞する、ということをテーマにしていたからだ、と考えられます。

また南インドのアマラーヴァティの中心の大佛塔において、無佛像時代にはナーガ像が主尊であり、有佛像時代になって代りに佛像が主尊の位置を占めるようになるのは、マトゥラーにおいて初期ヒンドウイズムのナーガ像がまず出現し、つづいて佛像が出現したことを反映していると理解し得るかもしれません。といえますのは、マトゥラーにおいては、叙事詩『マハーバーラタ』の発達にともなってナーガ像が発達しつつあったことが考古学的に確認され、その伝統をふまえて讚佛・讚菩薩文学の発達にともなって佛像が出現したことが考古学的にも確認されるのに対して、アマラーヴァティにおいてはナーガ像も佛像も、外からの影響で造形されはじめたと考えられるからです。ともかく、マトゥラーにおいて『般若経』などの大乘經典運動がはじまって、それがアマラーヴァティへ伝来して、この地で『華嚴経』などの大乘經典の創作活動がはじまると考えられます。

つぎに第二の問い「美術史的に、どのような形態で佛像は出現したか——佛塔の塔身内部からか、あるいは単独像としてか」については、つぎのように考えます。(1)インド美術史において佛塔を中心に佛伝・ジャータカ図などが発達しはじめて以来、久しく佛像が空白に残されたのは、佛塔そのものが佛が実在する場所であったからであり、佛の实在が直接、証知されている限り、佛を佛像として表現する必要がなかった。しかし、(2)やがて佛塔が即ち佛の实在であることが、漸々に証知され難くなってきたときに、佛教者達は、新しいしかたで佛を証知しようとしはじめた。それは、佛伝やジャータカの物語を単独で物語るところからはじめて、それらを集成して讚菩薩・讚佛文学を創作して、樂器の伴奏などによって頌めうたう言葉の靈力によって佛を証知しようとしたのであった。その段階で佛塔へ入っていく東西南北の門、あるいは基壇部、あるいは塔身部から佛像が出現しはじめる。即ち佛塔に実在していました佛そのひとが、新しいしかたで証知されるようになったとき、佛塔から佛像が出現しはじめたと考えます。(3)つぎに讚佛・讚菩薩文学から多数の佛名を稱名しつづける『佛名経』の伝統が発達しはじめ、他方で『般若経』などの大

乗経典が、新しく諸佛を諸佛たらしめる根本真理をほめうたう文学として発達しはじめる。大乘経典とは、新しいしかたで佛を直接、証知するために、ひとびとの心を三昧へ入らしめ、その三昧心へ佛を来現させるための文学であった。かくして佛塔の塔身部から出現してきたいた佛像が、どんどん巨大化していつて、ついには佛塔と並立する単独像になるのではないか。したがって、わたくしは、讚佛・讚菩薩文学から大乘経典へと発達していったからこそ、佛塔から佛像が出現してきたのであり、大乘経典運動と佛像の出現とは、無関係だとはいえないと考えます。

ここでは「マトウラーなる大衆部の説出世間部の律蔵」と自称する『大事 (Mahāvastu)』に編入されている讚佛文学「これは世間に随順するのである」の一部分を和訳することによって、佛像を前にしてほめうたう讚佛文学の具体例を紹介しておきたいと思います。

讚佛文学「これは世間に随順するのである」(『大事 (Mahāvastu)』i, 162 f.)

あなたのみもとに礼拝したてまつる。佛よ、かぎりなく見そなわすひとよ。あまねく見る眼あり、百の徳をあらわす身体的特徴あるひとよ。恵みぶかく、慈しみぶかく、もつともすぐれた真理をさとっているひとよ。ゴータマなるひとよ。わたくしは、心ゆさぶる美しい頌めうたうたいつつ、あなたに礼拝いたします。

……

たしかに御足を水で洗うのであるが、ここなる佛の御足は泥でよごれているわけではない。御足は蓮華の葉の如くである——これは世間に随順するのである。

たしかに、さとりをさとした諸佛は、沐浴するのであるが、ここなる諸佛の身体に塵垢がついているわけではない。それは黄金の身体の如くである——これは世間に随順するのである。

齒は磨かれていて白く、尊顔は青蓮華の香りにおうように化粧されている。下衣も身につけていて三衣を着ているのであるが、毘藍風が吹こうとも、諸佛の身についた僧衣を微動だもさせることはない——これは世間に随順するのである。

……

めでたい如来の身体は、性の交わりによつて生まれるのではないが、父母のあることをあらわし示す——これは世間に随順するのである。

燃灯佛をはじめとする諸如来は、淫欲がなくなっているのであるが、ラーフラなる息子があることを現わし示す——これは世間に随順するのである。

無数劫の久遠にわたつて般若の智慧の究極をきわめているのであるが、幼少のころを現し示す——これは世間に随順するのである。

……

本讀佛文学「これは世間に随順するのである」が、「百の徳ある身体的特徴」をもち、「御足を洗う」儀式の対象となり、「黄金の身体」あり、「白い齒」があり「青蓮華のような眼」があり、「毘藍風が吹こうとも微動だもしない僧衣」をつけた佛像を前にして、頌めうたっていることは、いうまでもありません。おそらく百年をこえる佛伝・ジャータカ文学の發達を継承して、このような讀佛文学が、頌めうたわれるようになった段階で、佛像が出現している、と考えられます。やはり、讀佛・讀菩薩文学を頌めうたうという新しいしかたで佛そのひとを証知するようになっていたのであり、そのときに佛塔から佛像が出現しはじめた、と考えたいと思います。



なお、高原信一氏の研究によって、この讃佛文学が、大乘思想によって増広されて同じリフレインをもった初期大乘經典、支婁迦讖訳『内蔵百宝経』へ發達したことが明らかにされていますし、さらに後者の一部が、大衆部の「東山住部」の詩頌として月称の『中論注』に引用されていることも指摘されています。いま、初期大乘經典『八千頌般若経』の思想によって増広された本経の二三の詩頌を引用しておきますと、つぎの如くです。

『内蔵百宝経』(TT 17. 751 f.)

……

衆生の世間存在は不滅であり不生であり、あらゆる存在の根源界において平等平等であるが、衆生の存在を現示す —— これは世間に随順するのである。

あらゆる存在は無生であるという無生法忍のさとりをば、いついかなるところにおいても現成せしめ得るのであるが、そうするにふさわしいところにおいてのみ現し示す —— これは世間に随順するのである。

……

かれら諸佛は、別々な身体をもつのではないが、諸佛の佛国土が無数であり諸佛の身体が無数であることを化作する —— これは世間に随順するのである。

……

これは、佛像を前にして頌めうたう讃佛文学が、たしかに大乘經典へと發展していったことを示す数少ない確実な文献証拠の一つだ、といわなくてはなりません。しかし、それにしても佛像を前にして頌めうたう讃佛・讃菩薩文学

が、いよいよ大乘經典へと発達していったときに、どのような根本的に新しい宗教体験があったのでしょうか。それは、どのように以後、数百年以上に及ぶ大乘經典運動の原動力になったのでしょうか。それは、どのように佛像を中心とする種々様々な莊嚴をともなう芸術運動の原動力になったのでしょうか。次節では、上述の第三の問いに答えるというしかたで、大乘經典運動が、大乘經典を頌めたいつづけていつて三昧のエクスタシーへ定在し、そこにおいて諸佛を直々に証知するという宗教体験（大乘經典において「不退転」あるいは「無生法忍」とよばれる）を原動力とすることを例示しておきたいと思えます。

## 2 佛教学的にどのような思想運動から佛像は出現するか

以上、讚佛文学が大乘經典へ発達していった実例を引用いたしました。より根本的かつ直接的に大乘經典運動の源流となるのは、同じく『大事 (Mahāvastu)』に伝えられている讚菩薩文学、原始『十地經』であると考えられます。この原始『十地經』こそが、佛伝・ジャータカ文学運動以来はじまっていた言葉の靈力による宗教体験から、上述の佛像を前にして頌めうたう讚佛文学の宗教体験を経て、さらに「不退転」という大乘經典の根本の宗教体験へと深めていった文学であり、そこから原始『八千頌般若經』、原始『華嚴經』などの大乘經典運動が展開していく、とみてよいと思えます。

いま、この原始『十地經』を詳しく紹介することはできませんが、一言にしていえば、無数につくられていたジャータカ物語を十地の位よりなる六波羅蜜行——六種の自由な菩薩行——へと集大成してほめうたう讚菩薩文学である、ということが出来ます。おそらく、この段階で、われわれ人間も、佛像を前にして誓願儀礼を行い発菩提心すれば菩薩になるのだという発菩提心運動がはじまっていて、その菩薩が、どのように菩薩行すればよいか、という問

いに答えるべく、この経典がつくられたといえるか、と思います。この原始『十地経』の根本の構造は、第一地で発菩提心するための誓願儀礼と布施波羅蜜行をほめうたうところからはじめて、第二地以降、戒・忍などの諸波羅蜜行を行うことを頌めうたいながらエクスタシーへ入っていき、最後に第八地において無数の佛名を唱えながら三味のエクスタシーへ定在し「不退転」の宗教体験を得るところへ究極するということができます。おそらく最後に第八地以降、無数の佛名を唱えつづけていくのは、そこにおいて諸佛を直接、現前させ証知するためであろうと考えられます。

さて最初の大乗経典ともいべき原始『八千頌般若経』は、原始佛教の伝統の中で古来の「四禪定」「四無色定」体系を、さらに超脱する最高の「定」として修行されるようになっていた「空性・無相・無願」の三三昧を転用して、般若波羅蜜——般若の智慧の自由な菩薩行——を頌めうたうことによつて「空性・無相・無願」の三三昧へ定在し、そこにおいて「不退転」「無生法忍」を忍得し、諸佛を直々に証知しようとする経典として創作されはじめたと考えられます。『般若経』が、あらゆる諸存在の「無」をうたい「空性」をうたいつづけるのは、「空性・無相・無願」三三昧へ定在し、そこにおいて「無生法忍」を忍得し、諸佛に直々にま見えようとしたのであり、かかる新しいしかたで諸佛の存在を証知しようとしたのだ、ということができると思います。いま、原始『八千頌般若経』そのものに即して、これらの諸点を論ずることはできませんが、ここに『八千頌般若経』に附せられた薩陀波倫菩薩——常啼菩薩——の求道物語があります。これは、原始『八千頌般若経』を創作しつづつあった時代に、般若の智慧の自由な菩薩行を求道するとは、どのような宗教体験であるか、そこにおいて、どのように段階的に諸佛を直々に証知するか、を興味深く説いていますので、その要旨だけを引用しながら、ごく簡単にコメントしておきます。

## 『道行般若経(八千頌般若経)』薩陀波倫菩薩品第二十八

## 常諦菩薩の求道物語(要旨)

(1) 仏なき世に、いそいで仏になりたいと願求するひと

仏なき世に、いそいで仏になりたいと願求するひとが、般若の智恵の自由な菩薩行を求道するときには、常諦菩薩が求道したようにしなくてはならない。……久遠の昔の世に常諦という名の菩薩がいた。……あるとき菩薩が、睡眠しているとき、……夢の中でひとりの神が告げた。「もしも、お前が大いなる真理を求道するのであるならば、いま、すぐに目覚めて起き、歩いていくがよい」……仏にま見えない、仏経を聴聞したい、とさがしまわつてみても、見つからない。そこで悲しみに沈んで、わあわあ泣きさざめいた。……三十三天の神が「常諦菩薩」と名づけた。

本物語は、はじめ「仏なき世に、いそいで仏になりたいと願求するひとは」という言葉ではじまります。ここで二つのことをコメントしておかなくてはなりません。第一は、上来、述べてきたように佛塔において永遠に実在しておられると信ぜられた佛が、だんだん証知し難くなってきて佛伝・ジャータカ文学が発達しはじめ、佛塔を中心とする造形芸術も発達してきた、そしていよいよ佛が証知し難くなってきたからこそ、さらに讚佛・讚菩薩文学がうたわれ、佛像が出現する段階に至ったといえるかと思えます。したがって、いまや「佛なき世」というニヒリズムの段階に入ってきたからこそ、大乘經典を頌めうたいつつ「三三昧」に定在し「不退転」「無生法忍」を得るといふ新しいしかたで諸佛を証知するという宗教体験が成立したと考えられます。

第二は、ここで「いそいで佛になりたいと願求するひとは」といいますが、『八千頌般若経』など初期大乘經典の主題は、あくまでも「三三昧」に定在し、「不退転」「無生法忍」を得て、諸佛に直々にま見え、諸佛から「しかしか

の名の佛になるよ」という「授記」をいただくことであって、けっして直ちに佛になるための実践道を説こうとしているのではない、ということです。いわば「佛になる」ためには、まず「佛にま見えなくてはならない」と説いているにすぎません。

(2) 無上法来仏という仏名を聞く

その世には「無上法来仏」がいましたのであるが、はるか久しい昔に、入滅されて、仏経を聴聞することもなく、比丘達の教団もなかったのであった。……「かつて無上法来仏がいましたのである」と夢の中で仏の名号を聞いて、ぱっと目覚めて、大いに歓喜し、直ちに家庭生活を捨てて、深い山中に入った。……「わたくしが悪業を積集しているから、仏にもま見え、仏経をも聴聞しないのだ」と思っては、わあわあ泣きさざめいた。

「佛なき世」のニヒリズムにおいて諸佛にま見えるように求道していくことは、「無上法来佛」という佛名を聴聞するところから、はじまります。いったい、佛名は、どこから聞こえてくるのでしょうか。この菩薩の心の根源から聞こえてくるとしか、いいようがないでしょう。そこで自らの心の根源へ向って佛を求道しはじめるのですが、どうしてよいか、わからなくなると、この菩薩は、わあわあ泣きさざめきます。おそらく泣くということが、自己の心の根源へ定在するための方法であるのでしょう。「常啼菩薩」と名づけられた所以です。

(3) 般若の智慧の自由な菩薩行を求道して東方へ歩いて行く

ふとそのとき、空中に音声がとどろいた。「もう、泣くのをやめなさい。般若の智慧の自由な菩薩行という大いなる真理がある。もし、それを修行するならば、たちまちのうちに仏になるであろう」と。「いったい、どのよ

うに般若の智慧の自由な菩薩行を発見するのでしょうか」「ここから東方へ歩いて行って休息してはならない。

君は、歩いていくときに、左のことを想つてはいけなし、右のことを想つてもいけない。前のこと……後のこと……上のこと……下のこと……歩いていること……怖いこと……うれしいこと……食べること……心の内なること……心の外なること……身体存在……気分存在……社会存在……意識の流れ……あらゆる諸存在を想うことを放捨してしまい、あらゆる諸存在になすまいようにするがよい。あらゆる念想を放捨して東方へ歩いていくならば、久しからずして般若の智慧の自由な菩薩行を聴聞することができるであろう……」

ここに至つて常啼菩薩は、「般若波羅蜜——般若の智慧の自由な菩薩行——を求道せよ」という空中の音声を聞きます。おそらく般若の智慧の自由な菩薩行の経典を聴聞することが、般若の智慧の自由な菩薩行を修行することになるのでしよう。しかしそれを聴聞するためには、東方へ向つて歩いていきながら、一切の念想を放捨しきつては放捨しきつていかななくてはならない、と教えられます。大乘経典を創作し大乘経典を誦誦しながら三昧へ定在する修行をしていた佛教者達にとつて、一切の念想を放捨しては放捨しきつていくことが、最も基本的な修行方法であつたと考えられます。それが、自己自身の心の根源へ向つて定在していくために必須な修行方法であつたのでしよう。

(4) 化身仏が現れて衆香城へ行くことを教える

……わあわあ泣きさざめいているときに、三十二相ある化身仏が空中に現れて言った。……「わたくしの説く佛教の真理を信じて、すっかり記憶し伝持するがよい——あらゆる存在は、本来清浄である……本来いかなる原因もない……言葉で表現することはできない……虚空の如くである……幻の如くである……このような念をしつかりと守つて東方へ歩いていくならば、「衆香国」がある……君が、もし衆香国の法來菩薩のもとへ行くならば、

かの菩薩は、必ずや、君のために般若の智慧の自由な菩薩行を説法するであろう」……

さらに、わあわあ泣きさざめいて自己の心の根源へ定在していった段階で、三十二相ある化身佛、即ち佛像が出現してきて、般若の智慧の自由な菩薩行によって実現される根源の眞実「空性」を説法します。ここにおいて自己の心の根源が、即ち諸佛を諸佛たらしめる根源の眞実「空性」であることが現成しはじめるのでしょうか。諸佛が三十二相ある佛像の姿をとって出現するとは、そのような根源の眞実から出現するのではないかと、思います。わたくしは、自己自身の心の根源である生命が、即ちあらゆる諸佛・菩薩・衆生を諸佛・菩薩・衆生たらしめる根源の眞実たる生命そのものであることが自覚されはじめるだけでも解釈し得るか、と思います。しかし常啼菩薩は、さらに、いま一つの関門を突破しなくてはなりません。それは、魔——死神——の姿をとって誘惑してくる深層の自我意識です。

(5) 「魔がほしいままに翻弄する国」に到る

「魔の支配する国」に迷いこんだときに、「衆香国」で法来菩薩に供養すべきものを買うために、わが身を売ろうと大声でよばわるが、魔が邪魔して、誰にも聞こえない。帝釈があわれに思つて波羅門の姿をとつて、常啼菩薩の身を買うことにする。両手を切り、両足をきり、……いよいよ最後に心臓を切り取ろうとしたとき、長者の娘が見ていて、常啼菩薩の身をすっかり買い戻す。

(6) 長者の娘・五百人の侍女とともに金銀財宝をもって衆香城の到り法来菩薩に「諸仏はどこから来てどこへ行くか」を問う。

ここにおいて常啼菩薩が、わが身を捨身して供養しようとして両手を切り両足などを切つていき、最後に心臓を切

り取ろうするのは、身体に執着する深層の自我意識を放捨しきっていくのだ、と理解されます。かくして深層の自我意識を放捨しきったところで、常啼菩薩の存在が根本転回して、新しい存在として「浄土」の共同存在を実現することになります。ここで常啼菩薩が長者の娘・五百人の侍女とともに金銀財宝をもって衆香城へ到るというのは、かく根本転回した新しい存在として「浄土」の共同存在を実現することであると解釈し得るか、と思います。そこで常啼菩薩は、法上菩薩に根本の問いを問います「諸佛は、どこから来て、どこへ行くのでしょうか」と。この問いは、「佛なき世」のニヒリズムにおいてすら、なお諸佛が出現することをあらしめる根源の真実「空性」を問うことによつて、般若の智慧の自由な菩薩行の説法を聴聞しようとしています。

(7) 法来菩薩は七年間、三昧に入った後に、般若の智慧の自由な菩薩行を説く

……「良家の子よ、それでは聴聞するがよい。あらゆる存在が平等平等であるように、般若の智慧の自由な菩薩行も、平等平等で同一である。あらゆる存在が本来分別され得ないように、般若の智慧の菩薩行も分別され得ない。……幻術でつくり出された人間が形体なきが如く……燃えている火が消えるとき、どこから来てどこへ行くのではないように……般若の智慧の菩薩行はあらゆるところに存在している……」

いま常啼菩薩と長者の娘・五百人の侍女の方も、七年の間に、さまざまな障礙を超越して般若の智慧の自由な菩薩行の説法会の法座を清浄にし、かれらの心をも自我意識なきように清浄にして三昧に定在しつつ、般若の智慧の自由な菩薩行の説法を待ちます。他方、七年間、三昧に入定していた後に出定して、法来菩薩は、般若の智慧の自由な菩薩行を説法しつづけていきます。かく説法する菩薩が、三昧から出定して新しい共同存在になって般若の智慧の自由な菩薩行を頌めうたいつづけていくとき、聴法する菩薩達も、三昧へ入定しつつ新しい共同存在になって般若の智慧



の自由な菩薩行を体得していくというしかたで、そこに究極の真実「空性」の共同存在が現成することが、大乘經典運動の根本の宗教体験であったと考えます。ここでは「不退転」とか「無生法忍」という語は用いられていないのですが、しかし、ここに大乘經典運動の根本の宗教体験が説かれていることは、すぐ、つづいて「三昧」と「授記」の宗教体験が説かれていることによって疑問の餘地がありません。

(8) 仏の音声を聞くことについて

「……たとえば、ハーブの音楽は、一つの条件によって生成するのではない。木部があり、柱があり、弦があり、手をはしらせて奏でる人があってこそ、奏でる音楽はうつくしく自由自在である。そのように仏の音声も、さまざまな条件によって生成する……」そのとき常諦菩薩は、かぎりなく歓喜して、六万の三昧を体得する。

(9) 常諦菩薩が「授記」を得る

「……譬えば、仏が入滅した後には、あるひとびとが仏像をつくる……そのように仏身も、一つや二つの条件によって生成するのではない。無数の条件によってである……」

菩薩が、このように修行していくならば、たちまちのうちに仏になることができるであろう……このとき諸仏は常諦菩薩に「未来世において、しかしかの名号をもった仏になるであろう」と授記を授けるのであった。

かくして常諦菩薩の求道物語は、常諦菩薩の根本の問い「諸佛は、どこから来て、どこへ行くのでしょうか」に対して、あらゆるとき、あらゆるところにおいて同一であり平等である究極の真実「空性」なる共同存在において、諸

佛は、そのときそのときに無数の諸条件によって出現するのであって、どこから来るのでもなく、どこへ行くのでもないと答えて「空性」なる共同存在を体得させるや、常啼菩薩が、六万の三昧を体得し、「しかじかの名号をもった佛になるであろう」と授記を授けられたというところでクライマックスに達します。

本「常啼菩薩の求道物語」は、原始『八千頌般若経』がまさしく創作されつつあったときに、かれら『般若経』の創作者自身が、自らの根本の宗教体験の深まりゆく諸段階に即して求道物語にしているのであって、大乘經典運動の根源にあった根本の宗教体験の実録として稀有なるものである、といわなくてはなりません。これによって大乘經典運動の根源にある根本の宗教体験は、「佛なき世」のニヒリズムにおいて新しい大乘經典を説法・聴法するといえられた諸佛を直々に証知するために諸佛を存在せしめる究極の真実「空性」なる共同存在を体得するにあつたといえるのではないでしょうか。そしてそれこそが、佛塔から佛像を出現せしめ種々様々な莊嚴によって莊嚴せしめた芸術運動の根源であつたといえるのではないのでしょうか。

これまで説明してきましたように、おそらくマトウラーの地で『大事』から『八千頌般若経』が成立し、どんどん発達していったのをうけて、ガンダーラ地方においては『阿闍佛国経』『大阿弥陀経』などが、どんどん、つくられていったと考えられますが、まさしくその頃、かれらが、どのように修行して三昧のエクスタシーへと定在し諸佛と直接に出会っていたか、を教える經典がありますので、クライマックスのところだけ要約しておきます。念佛三昧を説いた經典としてよく知られた『般舟三昧経』です。「般舟三昧」とは、サンスクリットで「現在十方の諸佛と菩薩が相互に面前に定在する三昧 (pratyuppannabuddhasammukhavasthasamadhi)」という意味です。『般若経』も『大阿弥陀経』も、そのような「般舟三昧」に定在するためにうたわれる經典であるということが出来ます。その「般舟三昧」に定在するためには、どのように修行すればよろしいか、という問いに対して「一念に定在せよ。この法を信じ、

聴聞したがままに念ぜよ。有るとか無い、前とか後、右とか左、暑いとか寒い、苦とか楽……妻とか子、好とか悪などなど、すべての念を放捨して、いかなる他念も想うな」と教えた上で、その一念とは、「無数の佛国土を超えていった西方に安樂国土に阿弥陀如来がいま生きておられて説法しておられる」ことを聴聞したがままに念ずることだと説きます。

他方、南インドのアマラーヴァティにおいても、マトウラーで始まった佛像の出現及び大乘經典運動を即時に反映して、従来、主尊の位置にあったナーガ像に替えて大きい佛像を中心にするべく大規模な改修工事が行われ、その際、佛像が蓮華座に坐るようになり、原始『華嚴經』を創作する運動が展開すると考えられますが、ここでは言及するにとどめます。

### 3 佛教哲學的にどのような根本事実として佛像は出現するか

以上、二節にわたって、インド佛教思想史において積尊が涅槃に入られた後、佛舍利をまつた佛塔において佛が実在しています、そこにおいて原始佛教經典を誦誦すれば、それが佛のことばだ、と信ぜられ、その限り原始佛教の伝統が存続し得たのであるが、積尊入滅後、二百年たち三百年たつあいだに佛塔に佛が実在する、ということがだんだん証知できなくなつて、新しいしかたで佛の實在を直接、証知するべく佛塔を中心とした造形芸術が発達し、それとともに佛伝・ジャータカ文学がさかんに創作されるようになった、つづいて佛塔から佛像が出現すると同時に讚佛・讚菩薩文學運動が発達しはじめたが、いよいよ「佛なき世」のニヒリズムに入つて、佛塔から佛像が独立しはじめらるや、それを対象にして大乘經典運動が展開し、大乘經典を頌めうたいながら「空性・無相・無願」の三三昧に定在し、そこにおいて諸佛を現前に証知するという根本の宗教体験が成立した、そこからさらに数百年に及ぶ大乘佛教

運動が展開するであろう、ということ論じてきました。

それでは、初期大乘佛教運動を展開しつつあった佛教者達は、どのような日常の修行生活を生きながら大乘佛教の根本の宗教体験を体得していたのでしょうか、と問うとき、ここに、きわめて興味深い証言がありますので、引用しておいた上で、第四の問い「佛教哲学的にどのような根本事実として佛像は出現するか」に、ごく簡単に答えてみたいと思います。

大乘佛教最初の哲学者である龍樹の著作であると考えられる『菩提資糧論 (\*Bodhisambhāra)』(大正32: 531a - 532b)に、つぎのような最初期の大乗經典作者達の儀礼及び修行の具体相が、記録されています。

說悔我罪惡 請佛隨喜福 及廻向菩提 如最勝所說

右膝輪著地 一體整上衣 晝夜各三時 合掌如所作

……

於三解脱門 応当善修習 初空次無相 第三は無願

無自性故空 已空何作相 諸相既寂滅 智者何所願

……

我於涅槃中 不応即作証 当發如是心 応成熟智度

如射師放箭 各各転相射 相持不令墮 大菩薩亦爾

解脱門空中 善放於心箭 巧便箭統持 不令墮涅槃

我不捨衆生 為利衆故 先起如是意 次後習相応

わたくし自身の無始時來の罪惡を懺悔する言葉を表白し、諸佛に対して、いまここに照看を垂れたまわんことを請願し、あらゆる衆生に福德あることを随喜し、また自己自身の福德を無上菩提へ向けて廻向する——それは最勝なる佛が説かれたとうりである。

右膝の膝蓋を地につけて一方の肩に上衣かけ正しく着衣している。昼三回と夜三回、定時に合掌礼拝すること、儀軌どおりである。

……

三解脱門の三昧をよくよく修習すべきである。最初は空性三昧であり、次は無相三昧であり、第三は無願三昧である。

「どのように修習するか、といえは、空性三昧とは、わたくし自身の存在も、その他、あらゆる諸存在も、個々別々の存在として」自性をもつて存在するのではない、それ故に「空性」としかいいようのない共同存在を思惟するのである。「無相三昧とは」「空性」なる共同存在を思惟する故、個々別々の存在を分別構想することはないのである。「無願三昧とは」もはや個々別々の存在が寂滅してしまつて存在しない「究極の共同存在そのもの」を思惟する故、智者たる者、何らかの存在を願求することもないのである。

……

わたくしは、つぎのような發菩提心を發心しなくてはならないのである——「そのように究極の「空性」なる共同存在を思惟しながらも」いま、直ちに完全な般涅槃を得証し寂滅に入つてしまつてはならない、そうではなくして般若の智慧の自由な菩薩行を成熟させ円成させなくてはならない、と。

「どのようにするか、といえは、」弓道の名人が、天空へ向けて矢を射ておいて、それが落下してくるや、そ

こへ次の矢を射て再び飛上させ、さらに次から次へと矢を射ぬいていつて、どの一本をも落下させないようにする如くである。大菩薩も、そのようにしなくてはならぬ。

即ち三解脱門の三昧をよくよく修習するにあたっては、まず「空性」なる共同存在へ向けて高く高く心の矢を射るがよい。その上で、次から次へと善巧なる方便の心の矢を射つづけて般涅槃の寂滅へと墮落しないようにするのである。

わたくしは、いかなる衆生をも見放してはならない、あらゆる衆生を済度する利他行を行じなくてはならないからである——以上のように、はじめに發菩提心を發心してから、次から次へと修習しつづけていくのである。

さきに第二節では大乘經典運動の原動力になるのは、どのような根本の宗教体験であろうかということ、原始『八千頌般若經』に伝えられる常啼菩薩の求道物語によつて例示しようとしたのですが、たしかに同一の根本の宗教体験が、龍樹のような歴史的に実在した哲学者によつても修行され体得されようとしていた、ということがいえるか、と思います。大乘佛教最初の哲学者、龍樹も、誓願儀礼によつて發菩提心して菩薩になった上で、毎日、昼夜六時において「懺悔・請願・隨喜・廻向」を實踐しつづ、最も根本的には「空性・無相・無願」の三三昧に定在して根本転回し、新しい存在として究極の根本真実「空性」——諸佛・菩薩・衆生との共同存在——を實現しようとしていた、といつてよいでしょう。とすると、それは、現代に生きるわれわれにも、いま「佛なき世」において、どのように求道していけば諸佛をよみがえらせ新しい佛教文化を創造していくか、の哲学の道を教えているのではないのでしょうか。以上の論述から、いくつかの哲学的真実を読みとっておきたいと思ひます。

- (1) 「佛なき世」においても人間が生きているかぎり、そこには生命が生きている、したがって生きている心が実在するのであり、まさしくその生きている心において佛を求道することができる。
- (2) わたくしたちが、いまここに生きている心において佛を求道していつて佛を証知するためには、一切の想念を放捨しては放捨しつづけて、いまここに生きている心へと定在しなくてはならない。
- (3) いまここに生きている心へと定在していくとき、「空性・無相・無願」の三三昧という実存のありかたが出現してきて、新しい存在へと根本転回する。
- (4) 「空性・無相・無願」の三三昧において根本転回して新しい存在になるとは、あらゆる諸佛・菩薩・衆生の生きている心との共同存在「空性」を実現して新しい菩薩存在となり無限の菩薩行を實踐していくことである。
- (5) ここには新しい菩薩存在の生きている心とあらゆる諸佛・菩薩・衆生の生きている心が、無碍自在にコミュニケーションしあう共同存在「空性」が実現されている。それは、無碍自在な生命そのもののコミュニケーションとでもいうことができよう。
- (6) われわれ衆生の生きている心において佛像が出現するとは、諸佛・菩薩・衆生の生きている心との共同存在「空性」からの無碍自在なコミュニケーションがはたらいてることであり、われわれ衆生は、佛像のいますところから佛からの説法を聞法しながら仏道修行することができる。
- (7) 新しい菩薩は、あらゆる諸佛・菩薩・衆生の生きている心との共同存在「空性」から、つねにインスピレーションをいただきながら文化創造していく。

## 結 論

いま一度、本日お話ししようとしたことを要約しながら、ここでは論じきれなかった論点をもふくめて、わたくしの現段階での大乘佛教起源論の要点をまとめさせていただきますと、つぎの如くです。

- (1) 原始佛教時代を通じて佛塔は佛舍利を内蔵することによって、佛が永遠に実在するところだ、佛は佛塔において永遠に実在する、と信ぜられていた。だからこそ、そこにおいて仏は造形表現されなかったのだ。
- (2) いま佛が永遠に実在するところにおいて佛からのインスピレーションを受けて佛弟子達は原始佛教経典をうたっていた——それは伝承でもあり創作でもあった。
- (3) 紀元後一世紀頃、佛塔において佛が実在するということが信ぜられなくなるようだ。同時に原始佛教経典の創作も、はたと止んでしまう——佛がいなくなったというニヒリズム。より根本的にはヴェーダ以来の神々もいなくなったというニヒリズム。
- (4) 紀元後一世紀頃、まずヒンドウイズムの方で、ナーガ像などを礼拝対象として、叙事詩などをほめうたいつつ三昧のエクスタシーに入り、ヴィシュヌなどの神々を直々に証知するという宗教体験が、新しく体験されはじめる。
- (5) それと並行して佛教においても、佛塔から佛像が出現しはじめ、佛像を礼拝対象として発菩提心儀礼を行って菩薩になり、讚菩薩・讚佛偈・佛名経などをほめうたいつつ三昧のエクスタシーに入り、佛を直々に証知するという宗教体験が、新しく体験されはじめる。
- (6) 大乘経典とは、そのような佛像の前で讚菩薩・讚佛偈・佛名経などをほめうたう伝統をさらに究極にまで徹底さ



せて、佛を佛たらしめる——佛を新しく誕生せしめる——「空性」なる共同存在の根本真理をうたつていく頌めうた文学である。「空」だ「空」だと頌めうたいつづけていつて三昧のエクスタシーに入り、佛を直々に証知するのである。

- (7) だとすると佛像が出現し佛像を礼拝対象として発菩提心儀礼を行つて菩薩になり讚菩薩・讚佛偈・佛名経などを頌めうたうという佛像創作運動とかく佛を証知するように「空性」なる共同存在の根本真理をうたいつづける大乘経典運動とは、やはり、一つづきの運動だ、といわなくてはならぬ——佛なきニヒリズムにおいて、新しく佛を再創造しようとする運動だ。

- (8) その後も、マトゥラーヤやガンダーラ、あるいはアマラーヴァティなどの諸地域において佛塔から、どんどん多数の佛像が出現してくる。そこにおいて多数の大乘経典が創作されたにちがいないが、われわれは、いまだ、どの佛塔において、どの大乘経典が創作されたか、を説明するに至っていないが、二つほど憶測を述べることが許されるならば、ペシャワールの東北方、約四十五キロメートルにあるモハメッド・ナリ、サーリバロールなどの諸遺跡は、『無量寿経』などの阿弥陀浄土経典が創作された地方ではないか。さらには、南インドのアマラーヴァティにおいて佛像が蓮華座に坐りはじめることからすると、そこで『華嚴経』が創作されたのではないか。

- (9) インドから中央アジアを経て中国へ、さらに日本へと伝来した佛教は、はじめから佛像のいますところで大乗経典を頌めうたう佛教運動であったのであって、佛像をともなった大乘佛教こそが、東アジアに伝来したのであった。そこにおいて佛像とは、何であったか——というならば、佛像のいますところが、即ち佛が永遠の実在として実在するところであったであろう。佛像のいますところにおいて佛からのインスピレーションをうけて佛経が講義されてきたのであった。

(10) しかるにいまや、多数の佛像のいます奈良の都ですら、佛が永遠の実在としては実在しなくなったのではないか。

否、いまや、地球上のあらゆるところにおいて、神々もいままさず諸佛もいままさないニヒリズムがはびこっているのではないか。現代に生きるわれわれは、いずこに、そしていかにして新しく神々を再生させ、新たに諸佛にま見えるであろうか。新しい神像・佛像を創造することができるのであろうか。

(11) インド・中国・日本などの佛教思想史において、それぞれの時代・地域に固有な無数の諸佛像を創造してきた根本真理が、佛を佛たらしめる——佛を新しく誕生せしめる——「空性」なる共同存在であったとすれば、いま、地球上のあらゆる諸地域の文化的伝統において神々を創造し諸佛を創造するのも、「空性」なる共同存在だ、とはいえないか。

(12) 但しいうまでもなく、われわれ現代に生きる人間ひとりひとりの心そのもの、生命そのものが、それぞれに固有なしかたで求道されて、いまここの無意識の深層の諸層を突破したところで根本転回し、即「空性」なる共同存在そのもの、あらゆる生物の生命を生かしている生命そのものだ、と証知されることによって、でなくてはなないであろう。

〔編集委員会付記〕

同日、阿辻哲次京都大学教授（中国語・中国文化史）による「現代日本の漢字規格」と題する講演も行われた。尚、同講演録は『大谷学報』第86巻第1号に掲載されている。

〈キーワード〉無佛像時代、大乘經典運動、常啼菩薩